

世界文学·文化



先日、遅ればせながら映画「君のためなら何でも」(マーラ・ク・フォースター監督、2007年、米国)を見た。アフガニスタン人の2人の少年の友情を描いた作品だ。物語は1970年代のカーブルから始まる。貧困の差、民族の違いによる差別もあるが、そこにはまだ子供も大人も伝統の麻薬に興じる平和な日常があった。それがソ連の侵攻で壊滅される。主人公はアメリカ人亡命者、その後、内戦とタリバーンによる恐怖政治がアフガニスタンを支配する。

この作品が特筆に値するのは、平和だった頃のカーブルの街がスクローンによってばらに再現されていることだ。撮影されたのは中国西部にあるムスリムの街、カシガル。映画制作に携わったアフガニスタン人のスタッフたちも、破壊される前の自分たちの祖国が残ったかのように感じただとう。この映画の作品としての感動はソリューションのカーブルの街の風景とともに暮らす人々の姿には、20年にわたる内戦となり

■アフガニスタン映画でよみがえる平和な街

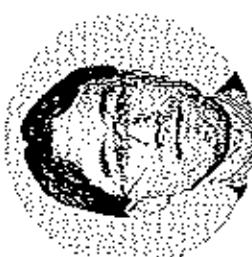
バーハの書記がアフカニス  
ターンの人々からうつたら何を  
書つたのかを、思ひ切る心で  
深く読みますけれどねから。

アフカニスカン、トロ、  
バレスナ……。じどうの地  
域がメティアド銀河系のじ  
き、私たもが画にするのはつ  
ねに輝く光輝だ。それ  
らの映像をうつす人々  
が敵の暴力を離かにしてくれます。しかし、私たもが  
おこなはした戦いからしたら、  
戦争や口論が、彼らから  
い？ たゞ何を争？ たのかを本  
當に知りたい者だけいたる  
う。そして、それが知らなか  
つたら、戦争や口論の暴力性  
を真正に理解する人のいる者か  
いだろ。

今月末、索羅で「トマソ」・イラク展」が開催される。70年代、イラクに避難していた日本人技術者がかの地で撮った、平和だった頃のイラクの写真展だ。春先、山畠地蔵を埋め戻す人々、チブリス川のほとりに誕生する東郷女子、そして何よりの悲劇の子供たち……。私たちの知らないイラクとその人々の幸福な姿は、失われた過去の風景であるだけではない。それは、私たちが作り出すイラクの未来の記憶の歴史である。

(医師監修・医療行為のリスク)

羽生聖棋位挑戦浦深に



銀川市五位

第6回  
敗戦が4月28日  
福島市にて終  
盤り、羽生晋  
王座への挑  
た。  
「羽生君、  
上山修の勝ち  
るが、思ひ不  
い」人間の本  
性がお出でな  
来る。

羽生晋王座  
ついで羽生晋  
羽生の2連勝  
だ。これを返  
しに相模6、7  
日の第4局、  
て、4連勝  
同時に2連勝  
「青じん松  
人組の源氏か  
べては三番の  
奥河野のや